

絵本の春

泉鏡花

青空文庫

もとの邸町やしきまちの、荒果てた土塀が今もそのままになっている。……雪が消えて、まだ間もない、乾いたばかりの——山国で——石のごつごつした狭い小路が、霞みながら——ひとす条煙じのように、ぼっと黄昏たそがれて行く。

弥生やよいの末から、ちつとずつの遅速はあつても、花は一時いつときに咲くので、その一ならびの塀の内に、桃、紅梅、椿つばきも桜も、あるいは満開に、あるいは初々しい花に、色香を装っている。石垣の草には、露ふきの臺とうも萌もえていよう。特に桃の花を真まつさき先に挙げたのは、むかしこの一廓は桃の組といった組屋敷だった、と聞くからである。その樹の名木も、まだそっちこちに残うらつていて麗うららかにに咲いたのが……こう目に見えるようで、それがまたいかにも寂しい。

二条ばかりも重かさなつて、美しい婦おんなの虐なしいたげられた——旧藩の頃にはどこでもあり来りきただが——伝説があるからで。

通とお道りみちというでもなし、花はこの近きん処じよに名所さえあるから、わざとこんな裏小路を捜さぐるものはない。日中ひなかもほとんど人通りはない。妙とし齡ころの娘でも見えようものなら、白昼さくといえども、それは崩れた土塀から影を頭あわしたと、人を驚かすであろう。

その癖、妙な事は、いま頃の日の暮方は、その名所の山へ、絡繹らくえきとして、花見、遊山に出掛けるのが、この前通りの、優しい大川の小橋を渡つて、ぞろぞろと帰つて来る、男は膚脱はだぬぎになつて、手をぐたりとのめり、女が媚なまめかしい友染ゆうぜんの袂端折つまばしよりで、唧楊枝くわえようじをした酔よつぱらい払ひまじりの、浮かれ浮かれた人数が、前後に揃つて、この小路をぞろぞろ通るように思われる……まだその上に、小橋を渡る聲あしおと音が、左右の土塀へ、そこを踏ふむように、とろとろと響いて、しかもそれが手に取るように聞こえるのである。

——このお話をすると、いまでも私は、まざまざとその景色が目なに浮ぶ。——

ところで、いま言つた古小路は、私の家から十町余りも離れていて、縁なで視なめても、二階から伸上つても、それに……地方の事だから、板葺いたぶき屋根へ上つてみまわしても、実は建たて連らなつた賑にぎやな町家に隔かてられて、その方角には、橋はもとよりの事、川の流ながれも見えないし、小路などは、たとい見えても、松杉の立木一本にもかくれてしまう。……第一見えそうな位置でもないのに——いま言つた黄昏たそがれになる頃は、いつも、窓にも縁にも一杯の、川向うの山ばかりか、我が家の町も、門かども、欄干てすりも、襖ふすまも、居る畳も、ああああ我が影も、朦もうろ朧うと見えなくなつて、国中、町中にただ一ひとすし条、その桃の古小路ばかりが、漫々として波しずかの静ずかな蒼海そうかいに、船脚ひを曳ひいたように見える。見えつつ、面白おもしろいような花見がえりが、ぞ

ろぞろ橋を渡る跫音が、約束通り、とととと、どどど、ごろごろと、且つ乱れてそこへ響く。
 ……幽かすかに人声——女らしいのも、ほほほ、と聞こえると、緋桃ひももがぱつと色に乱れて、夕暮
 の桜もはらはらと散りかかる。……

直接じかに、そぞろにそこへ行き、小路へ入ると、寂しがって、気味を悪がって、誰も通ら
 ぬ、更に人影はないのであった。

氣勢けはいはしつ、……橋を渡る音も、隔へだたって、聞こえはしない。……

桃も桜も、真紅まっかな椿も、濃い霞に包まれた、朧おぼろも暗いほどの土塀の——ひとこころ処ところに、石垣を
 攀よじ上のぼるかと附着くっついて、……つつじ、藤にはまだ早い、——荒庭の中を覗のぞいている——かすり緋
 の筒袖を着た、頭の円い小柄な小僧の十余りなのがぼつんと見える。

そいつは、……私だ。

夢中でぼかんとしているから、もう、とつぷり日が暮れて塀越の花の梢こずえに、朧おぼろ月の
 やや斜ななめなのが、湯上りのように、薄くほんのりとして覗のぞくのも、そいつは知らならしい。
 ちようど吹倒れた雨戸を一枚、拾って立掛けたような破れた木戸が、裂きれめだらけに閉とざし

である。そこを覗いているのだが、枝ごし葉ごしの月が、ぼうとなどった白紙しろかみで、木戸の肩に、「貸本」と、かなで染めた、それがほのかに読まれる——紙が樹の隈くまを分けた月の影なら、字もただ花と苔つぼみを持った、桃の一枝ひとえだであろうも知れないのである。

そこへ……小路の奥の、森の覆おほつた中から、葉をざわざわと鳴らすばかり、脊の高い、色の真白まつしろな、大柄な婦おんなが、横町の湯の帰途かえりと見える、……化粧道具と、手拭てぬぐいを絞つたのを手にして、陽気はこれだし、のぼせもした、……微醉ほろよいもそのまま、ふらふらと花をみまわしつつ近づいた。

巢みみずくから落ちた木菟うさぎの雛ひよツ子このような小僧こぞうに対して、一種の大なる化鳥けちようである。大女の、わけて櫛くし巻まきに無雑作むざむざに引束ひつたばねた黒髪くろかみの房々ぼうぼうとした濡色ぬれいろと、色の白さは目覚しい。

「おやおや……新坊。」

小僧はやつぱり夢中でいた。

「おい、新坊。」

と、手拭てぬぐいで頬ほ辺べたを、つるりと撫なでる。

「あッ。」

と、肝かんを消して、

「まあ、小母さん。」

ベソを搔いて、顔を見て、

「御免なさい。御免なさい。父さんに言つては可厭だよ。」

と、あわれみを乞いつつ言つた。

不気味に凄^{すこ}い、魔の小路だというのに、婦^{おんな}が一人で、湯帰りの捷^{ちかみち}徑^{あやし}を怪^{いけな}んでは不可^{いけな}い。

……実はこの小母さんだから通つたのである。

ついで、(乙)の字なりに畝^{うね}つた小路の、大川へ出口の小さな二階家に、独身^{すま}で住つて、

門^{かど}に周易の看板を出している、小母さんが既に魔に近い。婦^{おんな}で卜筮^{うらな}をするのが怪しいので

はない。小僧は、もの心ついた四つ五つ時分から、親たちに聞いて知っている。大女の小

母さんは、娘の時に一度死んで、通夜の三日の真夜中に蘇^{よみがえ}生^{なま}つた。その時分から酒を飲

んだから酔つて転^{うた}寝^{たね}でもした気でいたろう。力はあるし、棺^{かん}桶^{おけ}をめりめりと鳴らした。

それが高島田だったというからなお稀有^{けぶ}である。地獄も見て来たよ——極樂は、お手のも

のだ、と卜筮^{うらな}ごときは掌^{たなごころ}である。且つ寺子屋仕込みで、本が読める。五経、文^{もん}選^{せん}すらす

らで、書がまた好^よい。一度冥途^{めいど}を徇^{さまよ}行^よつてからは、仏教に親^{した}んで参禅もしたと聞く。——

小母さんは寺子屋時代から、小僧の父親とは手^て習^{なら}傍^{ほう}輩^{ばい}で、そう毎々でもないが、時々

は往来ゆきぎをする。何ぞの用で、小僧も使いに遣やられて、煎餅せんべいも貰もらえば、小母さんの易やすをト
《み》る七星ししゆうを刺し繡ゆうした黒い幕を張つた部屋も知つている、その往ゆき戻もとりから、フトこ
のかくれた小路をも覚えたのであつた。

この魔のような小母さんが、出口に控えているから、怪あやしい可おそろ恐ろしいものが躡あわれようと
も、それが、小母さんのお夥な間かの氣まがするのために、何となく心こころ易やすくつて、いつの間に
か、小児こどもの癖くせに、場所柄ばしを、さして憚はらないでいたのである。が、学校をなまけて、不思
議な木戸に、「かしほん」の庭を覗くのを、父親の傍輩たうざいに見つかつたのは、天狗てんぐに逢あつた
ほど可恐おそろしい。

「内へお寄り。……さあ、一緒に。」

優しく背せを押おしたのだけれども、小僧には襟首つまを抓つかんで引立てられる氣がして、手足を
すくめて、宙あを歩あ行るいた。

「肥ふつといても、湯ゆぎめがするよ。——もう春はだがなあ、夜よはまだ寒い。」

と、納戸ひふで被布ひふを着きて、朱あかの長煙管ながぎせるを片手ひたに、

「新坊、——あんな処ところに、一人ひとりで何なにをしてしていた？……小母さんが易やすを立てて見てあげよう。
二階にがいへおいで。」

月、星を左右の幕に、祭壇を背にして、詩経、史記、二十一史、十三経ちゆうそ注疏ちゆうそなど本箱がずらりと並んだ、手習机を前に、ずしりと一杯に、座蒲団ざぶとんに坐すわつて、蔽おひのかかった火桶を引寄せ、顔を見て、ふとつた頬でニタニタと笑いなながら、長閑のじかに煙草たばこを吸つたあとで、円い肘ひじを白くついて、あの天眼鏡というのを取つて、ぴたりと額に当てられた時は、小僧は悚然ぞつとして震ふる上あがつた。

大川の瀬がさつと聞こえて、片側町の、岸の松並木に風が渡つた。

「……かし本。——ろくでもない事を覚えて、此奴こいつめが。こんな変な場処まで捜しまわるようでは、あすこ、ここ、町の本屋をあら方あらしたに違いない。道理こそ、お父とつさんが大層な心配だ。……新坊、小母さんの膝ひざの傍そばへ。——気をはつきりとしないか。ええ、あんな裏土塀の壊れ木戸に、かしほんの貼はり札ふだだ。……そんなものがあるものかよ。いまも現に、小母さんが、おや、新坊、何をしている、としばらく熟じつと視みていたが、そんなはり紙は気けも影もなかつたよ。——何だとえ？……昼間来て見ると何にもない。……日の暮から、夜へ掛けてよく見えると。——それ、それ、それ見な、これ、新坊。坊が立っていた、あの土塀の中は、もう家うちが壊れて草ばかりだ、誰も居ないんだ。荒庭に古い祠ほこらが一つだけ残っている……」

と言いかけて、ふと独で領いた。

「こいつ、学校で、勉強盛りに、親がわるいと言うのを聞かずに、夢中になって、余り凝るから魔が魅した。ある事だ。……枝の形、草の影でも、かし本の字に見える。新坊や、可恐い処だ、あすこは可恐い処だよ。——聞きな。——おそろしくなつて帰れなかつたら、可い、可い、小母さんが、町の坂まで、この川土手を送つてやろう。」

——旧藩の頃にな、あの組屋敷に、忠義がつた侍が居てな、御主人の難病は、巳巳巳巳、巳の年月の揃つた若い女の生肝で治ると言つて、——よくある事さ。いづれ、主人の方から、内証で入費は出たろうが、金子にあかして、その頃の事だから、人買の手から、その年月の揃つたという若い女を手に入れた。あろう事か、俎はなからうよ。雨戸に、その女を赤裸で鎚で打つたとな。……これこれ、まあ、聞きな。……真白な腹をずぶずぶと刺いて開いた……待ちな、あの木戸に立掛けた戸は、その雨戸かも知れないよ。」

「う、う、う。」

小僧は息を引くのであつた。

「酷たらしい話をすると思いでない。——聞きな。さてとよ……生肝を取つて、壺に入れて、組屋敷の陪臣は、行水、嗽に、身を潔め、麻上下で、主人の邸へ持つて行く。」

お傍そば醫師いしやが心得こころえで、……これだけの薬くすりだもの、念ねんのため、生肝せいかんを、生しょうのもので見せてか
らと、御前ごぜんで壺つぼを開けるとな。……血肝ちぎもと思おもつた真赤まっかなのが、糠袋ぬかぶくろよ、なあ。麝香じゃこう
入いりの匂袋においぶくろでもある事か——坊ぼくは知るまい、女の膚身はだみを湯ゆで磨こく……気取うくつたのは鶯うぐいすの
ふんが入いる、糠袋ぬかぶくろが、それでも、殊勝しよせうに、思おもわせぶりに、びしよびしよぶよぶよと濡ぬれて
出でた。いずれ、身勝手みやまな——病やまいのために、女の生肝せいかんを取とろうとするような殿様とんやうだもの……
またものは、歸かへつて、腹はらを割さいた婦おんなの死体したいをあらためる隙ひまもなしに、やあ、血ちみどれにな
つて、まだ動うごいていまする、とおのが手足てあしを、ばたばたと遣やりながら、お目通めどおり、庭前にわさき
で斬きられたのさ。

いまの祠ほこらは……だけれど、その以前いぜんからあつたというが、そのあとの邸ていだよ。もつとも、
幾いくたびも代しろは替かつた。

——余あまりな話わと思おもうけれど、昔むかしばかりではないのだよ。現いまに、小母こははさんが覺おぼえた、……
……ここへ一ひと昨年おとし越こして來きた当座とうざ、——夏なつの、しらしらあけの事ことだ。——あの土堀つちほりの処ところに人
だかりがあつて、がやがや騒さわぐので行いつてみた。若い男おとこが倒たふれていてな、……川向かわむかひうの新
地ち歸かへりで、——小母こははさんもちよつと見知みちつてゐる、ちとたりないほどの色男いろおとこなんだ——そ
れが……醫師いしやも駆附かきつけて、身体からだを檢しらべると、あんぐり開ひらけた、口くち一杯いぱいに、紅絹もみの糠袋ぬかぶくろ……」

「……………」

「糠袋を頬張ほおばつて、それが咽喉のどに詰つまつて、息が塞ふさがつて死んだのだ。どうやら手が届いて息を吹いたが。……あとで聞くと、月夜にこの小路へ入る、美しいお嬢さんの、湯帰りのあとをつけて、そして、何だよ、無理に、何、あの、何の真似だか知らないが、お嬢さんの舌をな。」

と、小母さんは白い顔して、ペロりとその真紅まっかな舌。

小僧は太い白蛇に、頭から舐なめられた。

「その舌だと思ったのが、咽喉へつかえて気絶をしたんだ。……舌だと思ったのが、糠袋。」

とまた、ペロりと見せた。

「厭いやだ、小母さん。」

「大丈夫、私がついているんだもの。」

「そうじゃない。……小母さん、僕もね、あすこで、きれいなお嬢さんに本を借りたの。」

「あ。」

と円い膝に、揉もみ込むばかり手を据えた。

「もう、見たかい。……ええ、高島田で、紫色の衣ものを着た、美しい、気高い……十八九の。……ああ、悪戯いたずらをするよ。」

と言った。小母さんは、そのおぼけを、魔を、鬼を、——ああ、悪戯いたずらをするよ、と独ひとり言ごとして、その時はじめて真顔になった。

私は今でも現うつながら不思議に思う。昼は見えない。逢魔おまが時から臙おぼろにもあらずして解わかる。が、夜の裏木戸は小兒心こどもこころにも遠慮される。……かし本の紙ばかり、三日五日続けて見て立つと、その美しいお嬢さんが、他所よそから帰つたらしく、背せなへ来て、手をとって、荒れた寂しい庭を誘つて、その祠ほこらの扉を開けて、燈明の影に、絵で知った鎧よろいびつのような一具の中から、一冊の草双紙を。……

「——絵解えときをしてあげますか……（註。草双紙を、幼いものに見せて、母また姉などの、話して聞かせるのを絵解と言った。）——読めますか、仮名ばかり。」

「はい、読めます。」

「いい、お見こね。」

きつね格子に、その半身、やがて、臙ろうたけた顔が覗のぞいて、見送つて消えた。

その草双紙である。一冊は、夢中で我が家の、階子段はしごだんを、父に見せまいと、駆上る時に、——帰ったかと、声がかかつて、ハツと思う、……懐中ふとこに、どうしたか失せて見えなくなった。ただ、内へ帰るのを待兼ねて、大通りの露店の灯影ともしびに、歩行あるしながら、ちらちらと見た、絵と、かながきの処は、——ここで小母さんの話した、——後のでない、前の巳巳巳の話であつた。

私は今でも、不思議に思う。そして面影も、姿も、川も、たそがれに油を敷いたように目に映る。……

大正：年：月の中旬、大雨たいうの日の午の時頃うまから、その大川に洪水した。——水が軟やわらかに綺麗で、流ながれが優しく、瀬も荒れないというので、——昔の人の心であろう——名の上へ女をつけて呼んだ川には、不思議である。

明治七年七月七日、大雨の降続いたその七日七晩めに、町のもう一つの大河が可恐おそろしい洪水した。七の数が累かさなつて、人死ひとしにも夥多おびただしかつた。伝説じみるが事実である。が、

その時さえこの川は、常夏とこなつの花に紅べにの口を漱そそがせ、柳の影は黒髪を解かしたのであつたに——

もつとも、話の中の川堤かわづつみの松並木が、やがて柳になつて、町の日貫めぬきへ続く処に、木造の大橋があつたのを、この年、石に架かけかえた。工事七分という処で、橋杭はしぐいが鼻の穴のようになつたため水を驚かしたのであろうも知れない。

僥倖さいわいに、白昼の出水だつたから、男女に死人はない。二階家はそのまま、辛うじて凌しのいだが、平屋はほとんど濁流の瀬に洗われた。

若い時から、諸所を漂泊さすらつた果はてに、その頃、やつと落着いて、川の裏小路に二階借がした小僧の叔母おばにあたる年寄としよりがある。

水の出盛つた二時半頃、裏向むきの二階の肱掛窓ひじかけまどを開けて、立ちもやらず、坐りもあえず、あの峰へ、と山に向つて、膝ひざを宙に水を見ると、肱の下なる、廂屋根ひさしやねの屋根板は、鱗うろこのように戦おのいて、——北国の習慣ならわしに、圧おしにのせた石の数々はわずかに水を出た磧かわらであつた。つい目の前を、ああ、島田鬚しまたまげが流れる……緋鹿子ひがのこの切きれが解けて浮いて、トちらりと見たのは、一条ひとすじの真赤まっかな蛇。手箱ほど部の重かさなつた、表紙に彩色さいしきえ絵の草紙を巻いて——鼓の転がるように流れたのが、たちまち、紅べにの雫しずくを挙げて、その並木の松の、就なかんずく中、山

より高い、二三尺水を出た幹を、ひらひらと昇つて、声するばかり、水に咽むせんだ葉に隠れた。——瞬まじく間である。——

そこら、屋敷小路の、荒廢離落した低い崩土くずれどべい塀には、おおよそ何百年来、いかばかりの蛇が巣くつていたろう。蝮まむしが多くて、水に浸つた軒々では、その害を被つたものが少ない。

高台の職人の屈くつきよう竟あまなのが、二人ずれ、翌日、水の引際を、炎天の下に、大川添ぞいを見物して、流ながれの末一里有余あまり、海へ出て、暑さに泳いだ豪傑がある。

荒海の磯いそ端はたで、肩を合わせて一息した時、息苦しいほど蒸暑いのに、颯ざあと風の通る音がして、思わず脊筋も悚然ぞつとした。……振返ると、白浜一面、早や乾いた蒸気いぎれの裡なかに、透すきなく打つた細い杭くいと見るばかり、幾百条とも知れない、おなじような蛇へびが、おなじような状さまして、おなじように、揃そろつて一尺ほどずつ、砂の中から鎌首もたを擡もたげて、一斉に空を仰いだのであった。その畝うねる時、齒か、鱗か、コツ、コツ、コツ、カタカタカタと鳴つて響いた。——洪水に巻かれて落ちつつ、はじめて柔やわらかい地を知つて、砂すなを穿うがつて活いきたのである。

打際ちぎわをただ礫つぶてのように左右へ飛んで、裸身はだかで逃げた。
きやツ、と云うと、島が真中まんなかから裂けたように、二人の身体からだは、浜へも返さず、浪なみう

大正十五（一九二六）年二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

初出：「文藝春秋 第四年第一號」

1926（大正15）年1月

入力：本山智子

校正：門田裕志

2001年6月25日公開

2012年9月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

絵本の春

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>